

〔研究ノート〕

カンボジアおよびタイにおける 将棋系ゲームに関する史料について

——A. バスティアンおよび K. ヒムリーによる研究との関連から——

細 川 裕 史

「ペルシャの伝承によれば、カナウジの王に仕える大臣がその発案者だとされているが、それはカーニャクブジャの王ではなく、カンボジアの王だったということも、まったくあり得ないことではない」
(Himly 1870: 121)

I はじめに

2023年、カンボジアで開催されたSEAゲームスにおいて、同国における伝統的な将棋系ゲーム「オク・チャトラン」が正式種目に採用された。そのことを報じたオンライン記事には、このゲームがカンボジア起源であるとする以下のような興味深い記述もあった。

カンボジア・チェスやクメール・チェスとしても知られるオク・チャトランの歴史について、広範に扱った文献は存在しないが、カンボジアでは何世紀にもわたってプレイされてきたと信じられている。

ある説によれば、オク・チャトランは、紀元後の早い世紀において、インドの商人や学者によってカンボジアにもたらされたという。[...] 別の説によれば、オク・チャトランは、おそらくは戦闘や戦略をシミュレートする方法として、カンボジアで生まれたという。このゲームの駒には象や馬、兵が含まれており、軍隊をテーマにしているという点が、この説の根拠になっている。(Wong 2023)

この記事は英文で書かれており、駒の名称はすべてチェスのものが使われているため断定は

できないが、この書き手は、オク・チャトランの駒には(その起源であるチャトランとは違い)「象」も「兵」も存在しないことを知らないように思われる。おそらくは、カンボジア起源説を紹介することでこの新種目を盛り上げようという意図から、このゲームに詳しくもない人物が記事を書かされたのだろう。しかし、細川(2023)で紹介したように、このように将棋系ゲームがカンボジアで生まれたとする説は、19世紀にも主張されていた。東アジアにおける将棋系ゲーム史研究の(ヨーロッパにおける)先駆者であるカール・ヒムリー(Karl Himly, 1836-1904)が、1870年に公開された論文において、将棋系ゲームの起源として、インドや中国とともにカンボジアを候補地にあげているのである。もっともそれは、アンコール遺跡群の壮大さがヨーロッパに紹介される一方で、その建築年代については史料が欠けていたために実際以上に古いものとみなされた結果であり、彼自身もその後、ゲームや駒の名称を根拠に明確にインド起源説をとっている¹⁾。

カンボジアの将棋系ゲームおよびそれとほぼ同一のゲームであるタイのマックルックについては、19世紀においても現在においても、それを「広範に扱った文献」が欠けている。そこで本稿では、ヒムリーが生きた時代までを対象に、これらのゲームの歴史を探るための史料を整理

し紹介する。なお、カンボジアにおける将棋系ゲームは、「オク・チャトラン(チャトランガ式将棋)」や「オク・クマエ(クメール式将棋)」などと呼ばれているが、本稿では煩雑さを避けるため、カンボジア語(クメール語)における将棋系ゲームの総称である「オク」とのみ表記することとする。

II オクの駒とその名称

史料について論じるまえに、オクおよびその駒の名称について整理しておきたい。オクはマックルックとほぼ同一のゲームであり、両者の相違はローカル・ルールを採用しているか否かの違いにすぎない。カンボジアでは、タイではもう一般的ではない「王の跳躍」(Cazaux/ Knowlton 2017: 79) および「種の跳躍」(ebd.) と呼ばれるルールが採用されており、その点だけがオクとマックルックを分ける基準になっている。しかも、これらのルールはタイでもかつては採用されており、また、このうち「種の跳躍」は現在のタイでも地域によっては採用されている²⁾。

マックルックとは異なり、オクの駒名についてはその日本語表記が定着していないので、英語版 Wiktionary を参考に、駒名とその仮名表記の一例を挙げておく。ただしキングに当たる駒だけは、19世紀の史料にも登場する名称を採用した。駒の動きは上記の特殊ルールを除けばマックルックと同じであり、したがってクイーンおよびビショップに相当する駒以外はチェスとも同じである。

ស្តេច (sdac, スダイツ): キングと同じ動き
 នាង (niang, ニアン): 象棋の士と同じ動き
 ក្បាល (kool, コール): 将棋の銀将と同じ動き
 សេ (seh, セツ): ナイトと同じ動き
 តួក (tuuk, トーク): ルークと同じ動き
 ត្រៃ (tray, トライ): ポーンと同じ動き³⁾

駒の名称について、もっともその由来が分か

りやすいのはセツで、「馬」という意味である。桂馬跳びをする駒は、世界各地で「馬」を表す名称をつけられるか、「馬」を表す駒の形をしている。つぎに、トゥークは「舟」や「カヌー」という意味であり、これも、ルークに相当する駒の名称として、隣国タイをはじめ世界各地にみられる。また、スダイツは「王」を表し、これも象棋の「将」および「帥」を例外として、世界各地にみられる名称である⁴⁾。

これら以外の駒名は、解釈がやや難しい。ポーンに相当するトライは「魚」という意味で、他の将棋系ゲームにはみられない名称である。この駒はマックルックでは「貝」を意味する名称であるため、両者にはなんらかの関係があるのかもしれない。一方、スダイツの横に位置するニアンは、「(若い) 女性」や「女性名につける敬称」とされ、Cazaux/Knowlton (2017) は「乙女 (maiden)」と訳している。この駒は、マックルックではまるで異なり、「種」あるいは「粒」を意味する名称(メット)である。チェスのクイーンはフランス語では「レディー」を意味する名称(dame)と呼ばれているので、むしろ、フランス保護領時代にそちらの影響を受けた可能性がある。コールは最も解釈が難しく、「球体」、「土台」、「一里塚」、「境界の柱」などさまざまな意味があるが、Cazaux/Knowlton (2017) はこの駒名に関しては「護衛(guard)」の意味であると述べている⁵⁾。

駒の名称に関しては、戦争を模したゲームから派生したにも関わらず、マックルックと同様に「馬」と「舟」を除けば軍隊を想起させるものがないことが、大きな特徴といえる。アンコール・ワットなどのレリーフが示すように、このゲームがすでに普及していたクメール帝国時代のカンボジアでは戦象が重要な兵力であったことを考慮すると、なおのことチャトランガにあった「象」の駒が無くなったことは特筆に値する⁶⁾。「騎馬隊」や「水軍」を意味していたはずの「馬」や「舟」といった名称も、これらの名称がカンボジア語に定着したときには、軍隊とは無縁のもの(たとえば移動手段など)と認識

されていたのかもしれない。

Ⅲ オクおよびマックルックに関する史料

1. アンコール朝時代

カンボジアでは記録のために、紙の代わりに「貝葉」と呼ばれるヤシの葉が使われていたが、この媒体は長期保存に向いておらず、カンボジア史をたどるための文献としては、遺跡に刻まれた碑刻文や外国人による旅行記などが利用されている。オクおよびマックルックに関する最古の史料とされているのは、以下の3つである。これらの史料が成立した時期はクメール帝国の最盛期にあたり、インドシナ半島の大部分が同国に支配されていた。この帝国は内陸農業国家だったが、幹線道路が整備されており「海のシルクロード」とも繋がっていたという点は、将棋系ゲームの伝播を考えるうえで無視できない。また、この時代には、シャム人は戦争捕虜や傭兵としてこの帝国と密接に関係していた。オクとマックルックの成立過程は判然としないが、すくなくともシャム人がクメール帝国の支配下にあったこの時代には、カンボジアではオクそのものか、その前身にあたる将棋系ゲームがすでに普及していたことは間違いない⁷⁾。

- 1) アンコール遺跡群のレリーフ (12世紀前半～13世紀前半)
- 2) プリラム窯の駒 (12世紀初頭～13世紀前半)
- 3) ポーロの『東方見聞録 (*Devisement du monde*)』(1300年頃)

先行研究の多くでは、アンコール遺跡群のレリーフ、なかでもスーリヤヴァルマン2世 (Suryavarman II, 生没年不詳) によるアンコール・ワット (建築時期: 1113-50) のものが、オクに関する最古の史料とされている。このレリーフには、将棋系ゲームの特徴である駒ごとの形状の違いも確認できるが、「馬」を表した駒

が見られない。また、その他の遺跡のものも含めてその内容を説明する碑刻文がないため、これらのレリーフがオクそのものを表しているとは断定できない⁸⁾。

これらの史料については、Ellinghoven (2003) が詳しい考察を行っている。彼によれば、遺跡群には合計4カ所に同様のレリーフが残っており、そのなかでもアンコール・ワットの第1回廊南西角にある「水祭」のレリーフが最古のものであり、かつ、もっとも鮮明にこのゲームを表している。Ellinghoven (2003) は、このレリーフにおけるプレイヤーを「天蓋付きのボートに座っている」(ebd.: 96) としているが、これは彼の誤認で、ボート・レースが行われている水路の奥にあるテラスで対局が行われていると解釈すべきだろう。いずれにせよ、このレリーフでは脚付きの盤や、現代のオクの駒に非常によく似ておりかつ複数の異なる形をした7つの駒も確認できる (図1)。また、アンコール・トムを建設したジャヤーヴァルマン7世 (Jayavarman VII, 生没年不詳) によるプリア・カーン寺院 (建築時期: 1184-1191) のレリーフにも、小さなボートのうえでオクラしきゲームがプレイされているものがあるが、部分的に崩壊している。このレリーフでも盤は脚付きで、駒は「ハチの巣箱のように反りのついたもの」(ebd.: 98) が3つか4つみられる。私見によれば (少なくとも日本語圏で) もっとも知られているのは、同じくジャヤーヴァルマン7世によるバイヨン寺院 (建築時期: 1191-1219) の第1回廊南東面に2つあるレリーフのうち、戦まへの王宮内の様子を描いた方である (図2)。ここでは、床に跪いたプレイヤーが薄い板を盤にして、形の異なる4つの駒をはさんで向かい合っている。もう一方は、「中国の商人たちを描いている可能性がある」(ebd.: 99) とされる「大きなジャンク」(ebd.) のレリーフである (図3)。このジャンクの舳先 (左上) では、作業中の水夫のそばに座った2人が、箱のような盤と形に差異のある駒5つを使ってゲームをプレイしている⁹⁾。最後のレリーフは、将棋系ゲームと「海

のシルクロード」の関係を想起させる点、また中国系と思われる人々が象棋ではなく立体ゴマを使った将棋系ゲームをプレイしている点が興味深い。

これらのレリーフにみられる駒について、Ellinghoven (2003) は以下のような考察を加えている。まず、盤の大きさに関しては、横1列に配置された駒の数がいずれも8つより少ないことから、 8×8 マスの盤を使う現代のオクとは異なるゲームだった可能性を指摘しつつも、当時も 8×8 マスだったが彫刻するにあたり単純化されたのだらうと推測している。また、これらの遺跡にみられる他のレリーフがとても精密であることから(図4)、「馬」の駒につい

ては、正確に描写できなかったのではなく、現代のセッとは違い当時の「馬」の駒は他の駒と同様に抽象的な形をしていた、という可能性を指摘している。なお、オクの伝来については資料がないことから、彼は、北インドから陸路でクメール帝国に伝わった可能性と、海路でジャワを経由して伝わった可能性の両方をあげている。そして、いずれにしても、アンコール・ワットが造られた12世紀前半までにはすでに広く普及しており、レリーフに刻むほど重視されていたと主張している¹⁰⁾。

アンコール・ワットのレリーフと同時期に造られた可能性があるのが、タイのブリラム窯の駒である。現在のブリラム県はカンボジアとの



図1 アンコール・ワットの「水祭」のレリーフ
(撮影筆者、以下同様)



図2 バイヨン寺院の将棋系ゲームのレリーフ



図3 バイヨン寺院の「大きなジャンク」のレリーフ



図4 バイヨン寺院の騎馬隊のレリーフ

Oct. 2024

カンボジアおよびタイにおける将棋系ゲームに関する史料について

国境に面しており、駒が制作された頃、この地域はクメール美術の影響下にあったという。これらには「馬」と思われる駒も含まれており、オクおよびマックルックの存在を直接示す史料とみなされている¹¹⁾。

オクに関する最古の文献とされることが多いのは、マルコ・ポーロ (Marco Polo, 1254-1324) の『東方見聞録』におけるチャンパ王国の記述である。元朝によって派遣されたポーロが1285年に訪れたチャンパ王国の特産物のひとつとして、コクタンが挙げられており、これを用いて「将棋の駒」(ポーロ 2022: 231) が作られる、とされている¹²⁾。チャンパ王国は現在のベトナムにあったチャム族の国で、1177年にはクメール帝国の首都を占領するなど、同国に強い影響をおよぼしており、アンコール・トムにもその軍勢が描かれている。現代のベトナムでは、オクではなく象棋がおもにプレイされている。しかし、駒に書かれた文字およびその色で敵味方を区別する象棋では、駒自体を色分けする必要はないため、コクタンで「黒」の駒を作っていたことは、13世紀末には現在のベトナムにまでオクが広まっていた可能性を示唆している。もっとも、多くのバリエーションがあることで知られる同書には、「将棋」に関する記述がない版もあり、さらには、原文では別のゲームを指していた語が翻訳の過程でヨーロッパ人に身近なゲームの名称に置き換えられた可能性や、そもそも原文にはなかった一文を後世の編纂者が書き加えた可能性もある。したがって、同書をオクに関する史料とみなすことには議論の余地がある¹³⁾。

なお、ポーロの同時代人である元の周達観(生没年不詳)は、1296年から翌年にかけてクメール帝国の都アンコール・トムに滞在し、現地での記録を『真臘風土記』(14世紀初頭)として著している。同書は、実際にアンコール朝を訪れた人物の記録としては、現存する唯一のものとされている。彼は、現地の人々がどのように用を足すのかなど、庶民の日常生活についても記述しているが、散逸してしまったのか、遊

戯について書かれたものは後世に伝わっていない。舞や音楽、闘猪、闘象などについても述べているが、これらは季節ごとの催しとしての記録である。その一方で、現地にすでに35年も住んでいる中国人がいたことや、中国から多くの水夫が同地に逃げてきている話などが紹介されているため、象棋が(オクとともに)当時のクメール帝国でもプレイされていたと考える方が自然だろう¹⁴⁾。

2. 19世紀までの不確かな文献

14世紀半ばに成立したシャムのアユタヤ朝による度重なる侵攻の結果、1431年に首都アンコール・トムが放棄されて以降、カンボジアは衰退の一途をたどった。国内では王位を巡る内紛が続き、シャムとの力関係は完全に逆転する。さらに17世紀後半以降は(黎朝や阮朝などの)ベトナムからも侵略を受け、結局、カンボジアは19世紀前半までに北部をシャムに南部をベトナムに支配され、1863年にフランスの保護領となることでようやくその命脈を保った。この時期の同国については史料が非常に限られている¹⁵⁾。

- 4) アユタヤ年代記における1636年(?)の記述(バスティアンの『東アジアの諸民族 第1巻 インドシナの歴史 [Völker des östlichen Asien. Bd. 1. Die Geschichte der Indochinesen]』[1866a]所収)
- 5) ド・ラ・ルベールの『シャム王国誌 (*Du royaume de Siam*)』(1691)

『東方見聞録』以降、17世紀末のド・ラ・ルベールの文献まで、オクやマックルックについてヨーロッパ人が書いた文献は知られていない。しかし、後述するバスティアンの旅行記には、アユタヤ年代記からの引用として、以下の記述がみられる。シャム王ナーラーイ(Narai, 1632-88)がもつ「クリシュナのような神性」(Bastian 1866a: 319)を伝えるために書かれたと思われる

る記事なのだが、小暦998年のこととされる出来事の付記のような形で、唐突に「チェス」をする人々の話が載せられている。

当時まだ5歳だった幼いナーラーイ王子の気分がすぐれなかったため、[プラーサートーン]王は彼を残して祝いの席を訪れた。雨が降っていたので教育係が傘をさしでしたが、王子はそれを持たず、遊ぼうとして階段を駆けあがっていった。ちょうど彼が柱のそばに立っていたとき、雷が落ちて、その柱が真つ二つに裂けた。しかし、ナーラーイ王子は無傷で、おびえている教育係を笑っていた。そこで、息子の徳の高さを盛大に祝うために、王は豪華な祝宴を開かせた。この年、国王の厩舎でゾウの番人の一人が手工業の親方とチェスをしていると、二人のあいだに雷が落ち、番人は死に親方は助かった、という出来事があった。(Zit. nach Bastian 1866a: 319f.)

この「チェス」の原語は併記されていないが、シャムの年代記であるためマックルックに当たる語だったに違いない。このような年代記は、後年になってから王の偉大さを示すために書かれるものであったため、フォークロアや説話が雑然と集積されており、その年代表記の正確さには信用がおけないとされている¹⁶⁾。しかし、このエピソードは、ナーラーイの幼少期(1630年代後半)にはマックルックがアユタヤでプレイされていた、と(19世紀の)シャムの人々が考えていたことを示している。

このナーラーイの元を訪れたフランスの外交官、シモン・ド・ラ・ルベール(Simon de la Loubère, 1642-1729)の著書『シャム王国誌』は、『東方見聞録』とは異なり確実なものとして、マックルックに関する最も古い文献とされることが多い。1687年から翌年にかけてシャムの首都アユタヤを訪れたド・ラ・ルベールは、帰国後に同書を著し、シャム人の娯楽について扱った章のなかで、他のゲームとならんで「チェス」

にも言及している¹⁷⁾。

シャム人はとても賭博が好きで、そのため身を滅ぼしてしまい、自分自身や子供が身売りするはめになるほどである。[...]彼らがとくに好む賭博は、彼らが「サッカー」と呼ぶトリック・トラック[双六]で、おそらくはポルトガル人から教わったのだろう。というのも、彼らのプレイ方法は、ポルトガル人や私たちと同じだからである。カード・ゲームについては、彼らはまるで知らない。彼らが他のダイス・ゲームもするのかどうか、私には分からない。その一方で、彼らはチェスを、私たちと同じ方法で、あるいは中国式の方法でプレイしている。(Loubère 1800 [1691]: 126)

この箇所から、17世紀末のアユタヤでは2種類の将棋系ゲームがプレイされていたことが分かる。このうちの「中国式」と呼ばれているゲームは、イエズス会の宣教師が書いた報告書によってすでにヨーロッパでもその存在が知られていた象棋だったに違いない。アユタヤ朝は、その始祖であるウートーン(U Thong, 1314-69)自身が華人の後裔であるとされており、中国との密接な交易関係があっただけでなく、ド・ラ・ルベールが来訪した時期には華人が支配者階層の一角を担っていた¹⁸⁾。

その一方で、「私たちと同じ」とされているゲームは、先行研究ではしばしば無批判にマックルックとみなされているが、著者がフランス人であることから、チェスを指している可能性についても考えてみる必要がある。たしかに象棋とマックルックとを比較すれば、後者はフランス人に馴染みのあるチェスに似ている。シャム人の遊戯を調査しに来たわけではないド・ラ・ルベールが、マックルックの盤が8×8マスであることから安易に想像して、彼らがチェスをプレイしていると考えた可能性もある。しかし、彼は、その直前では、サッカーのプレイ方法を確認したうえで、ポルトガル人から教わっ

Oct. 2024

カンボジアおよびタイにおける将棋系ゲームに関する史料について

たのだらうと推測しているのである。将棋系ゲームに関しても、シャム人が実際にプレイしているところを目にしたうえで、「私たちと同じ方法」と評したと考えるべきではないだろうか。とりわけ、ナーラーイは1660年代以降、オランダの専横に対してフランスへの接近を図った人物であり、1670年代から80年代には両国間で親書や使節団が複数回にわたり送りあわれていたという背景があるため、ド・ラ・ルベールの身近にいたシャム人が（フランスで）チェスを学んでいた可能性も否定できない¹⁹⁾。あるいは、当時のマックルックにはビアの3列目配置など、一見して分かるほどのチェスと異なるルールがまだなかったのかもしれない。

なお、より時代は下るが、カンボジア王家の内紛に関して、アン・ノン2世 (Ang Non II, 1739-79) の時代に2人の高官が政敵である王の従兄弟を殺すために「チェス」を利用した、という話が伝わっている。彼らは、「チェス」の対局中に激昂したふりをして、王の従兄弟を撲殺したのだという。この事件について、キン(2019)は、わざわざ「チェスゲームでは、相手をからかうことが許されている。相手の集中力をそらせるのに役立つ」(キン2019: 56) という注をつけている。真偽のほどは定かではないが、オクがカンボジア王国史に関係したとする貴重なエピソードである²⁰⁾。

3. 19世紀の確かな文献

1850年代以降、すでにベトナムに侵攻を開始していたフランスの影響は、ベトナムの支配下にあったカンボジアにまで及んでいた。そのような状況にあった1860年、アンリ・ムオ (Henri Mouhot, 1826-61) がアンコール・ワットを「発見」して注目を集め、その4年後に、マックルックをドイツ語圏に紹介したアドルフ・バステアン (Adolf Bastian, 1826-1905) が同地を訪れることになる。ただし、アンコール・ワットのあるシェムリアップは、この当時はまだシャム領であった²¹⁾。

以下に、先行研究で指摘されてきた文献を中

心に、この19世紀にカンボジアあるいはシャムを訪れたヨーロッパ人が著した一次資料をまとめた。なおヒムリーの著作に関しては、ライプツィヒ版『絵入り新聞 (Illustrirte Zeitung)』およびMurray (1913) の記述を基に、彼自身がバンコクに住んだ経験があり、かつ同紙に寄稿した（記事内では匿名の）人物だとみなして挙げている²²⁾。

- 6) ロウの「シャムの文芸について (On Siamese literature)」(1836 [1829])
- 7) バステアンのライプツィヒ版『絵入り新聞』(1864) への寄稿
- 8) バステアンの『東アジアの諸民族 第3巻 1863年のシャム旅行 (Völker des östlichen Asien. Bd. 3. Reisen in Siam im Jahre 1863)』(1867)
- 9) バステアンの『東アジアの諸民族 第4巻 カンボジアからコーチシナへの旅 (Völker des östlichen Asien. Bd. 4. Reise durch Kambodja nach Cochinchina)』(1868)
- 10) ヒムリー (?) のライプツィヒ版『絵入り新聞』(1879) への寄稿
- 11) ムーラの『カンボジア王国誌 (Le royaume du Cambodge)』(1883)
- 12) ヒムリーの『ハルバーシュタット報知新聞 (Halberstädter Zeitung und Intelligenzblatt)』(1885) への寄稿

このように多くの文献が存在するが、このうち、その記述だけでこれらのゲームをプレイできるほど内容豊富なものは、ジェームズ・ロウ (James Low, 1791-1852) の報告書「シャムの文芸について」だけであり、これはまた、筆者の知る限りマックルックを紹介したと断定できる最古の文献でもある。ロウは、スコットランド出身でイギリス東インド会社のスタッフとしてシャムやマレーを調査した人物であり、1818年にペナンに赴任したのち、29年に同報告書を書き、36年に改稿している²³⁾。同報告書の第2部

「娯楽、ゲーム、楽しみ」では、ゲームの内容にまで詳細に言及されており、ド・ラ・ベールのものとは異なりマックルックを扱っていることが明確である。彼はシャム人が「賭博や、より害の少ない多くの娯楽に夢中になっている」(Low 1836: 374) と述べたうえで複数の遊戯を紹介しているが、その初めにマックルックを挙げ、「チェスの普遍性について、ここで主張する必要はない」(ebd.) と断言している。とても興味深いのは、4 ページにも渡って(将棋式に数えれば170手もの)長大な棋譜が挙げられていることや、複雑なカウンティング・ルールも紹介されている点で、19世紀後半に書かれた他の文献と比べても、その記述は群を抜いて詳しい²⁴⁾。彼自身が、将棋系ゲームに強い関心を持っていたことをうかがわせる。

ロウは、チェスと比較しながらこのゲームをていねいに紹介しているが、駒の動きに関しては現代のものと異なる点がある。しかし、その他の記述の精密さや、現代のタイにも開局時にメットを2マス進めるローカル・ルールがあることなどを考慮すると、彼自身が見聞きしたルールを正確に伝えていると考えて良いだろう。メットとコーンに関する以下の個所では、「種の跳躍」が紹介されており、また、コーンは後ろの駒がとれないとされている²⁵⁾。

メットすなわち「大臣」(我々のクイーン)はキングの右手に位置し、初手では前に2マス直進できる——しかし、一度動いてしまうと、その後は斜め四方に1マスずつしか進めない。

コーンすなわち「杭あるいは支柱」は、ビショップに相当する。初めて動く際には前にも斜めにも1マスずつ進み、ゲーム中はつねに自身の前にある敵の駒をとることができるが、自身の後ろにあるものはとれない。

[…]

ビアすなわち「コヤスガイ」(貝)は、ポーンに相当する。3列目に配置され、1マス

ずつ進む。初手でも1マスしか進めず、駒をとる際は斜めにとる。敵のポーンが配置されている列に到達するとメットすなわち「大臣」になり、その駒として動く。(Low 1836: 375)

その後、1860年代から80年代にかけて、バステアンおよびヒムリー(とされる人物)が、ドイツ語圏にオクおよびマックルックを紹介している。両者の文献については、後述する。

Murray (1913) がオクに関する文献として(「アンナン」の章において)唯一挙げているのが、ジャン・ムーラ(Jean Moura, 1827-85)の『カンボジア王国誌』である。同書はまた、一度は将棋系ゲームのカンボジア起源説さえ主張したことのあるヒムリーが引用した、オクに関する唯一の文献でもある。1868年以降、フランス海軍の将校としてカンボジアに関わったムーラは、同地に強い関心を持ち、その文化や歴史を研究するようになった。その成果が、カンボジア王国の歴史を古代から現代まで描こうとした同書である。彼は、カンボジア人にとっての一般的な気晴らしとして音楽や狩りとならんで「チェス」を挙げ、以下のように述べている²⁶⁾。

ほぼすべての役人がチェスをプレイする。私たちが見たところ、このゲームは世界中に広く普及しているようで、ヨーロッパでも有名だし、インドやチベット、モンゴル、インドシナ、アンナン、中国でもプレイされている。カンボジアの盤は、私たちのものに似ており、64マスある。プレイヤーは、それぞれ8つのピースと8つのポーンを持っている。ピースは、キング1つ、クイーン1つ、ナイト2つ、ルークの形の[ayant la forme de tours]「将」2つ、それからビショップ2つの代わりに「舟」2つである。そのほかの8つはまさにポーンで、この駒をクメール人は「魚」と呼んでいる。これは、“Sdach”(キング)が敵にとられないようにするというゲームであり、ヨーロッパととてもよく似た方法でプレ

イされている。(Moura 1883: 391)

Murray (1913) も指摘しているように、ムーラはオクにはあまり詳しくなかったようで、駒の名称と動きあるいは配置を混同している。上述したように、実際には「舟」がルークにあたり、ビショップの代わりの駒がチェスにはない動きをする駒(コール)である²⁷⁾。また、現代のオクとマックルックを区別する特徴とされている「王の跳躍」および「種の跳躍」については、どちらも触れられていない。

Ⅳ 19世紀のドイツ人による記述と考察

1. バスティアンによる新聞記事と旅行記

ベルリン民族学博物館の創設者の一人で、その初代館長として知られるアドルフ・バスティアンは、医学を学び船医としてオーストラリアに向かう船に乗りこんで以降、何度も世界旅行を行っている。1861年から65年にかけて行った東南アジアおよび東アジアへの調査旅行は、彼にとっては2回目の世界旅行であった。アジアにおける将棋系ゲームについては、この旅行中に初めて知ったようである。その旅の記録である『東アジアの諸民族』(全6巻、1866-1871)では、さまざまな国の遊戯類についても記述しているが、彼の関心が仏教にあったためか、それぞれの記述は基本的にはとても簡素である。また、そもそも、その大部分が旅行中のメモをそのまま印刷したような文章であり、よく言えば生き生きとした文体だが、テーマごとのまとまりに欠けている²⁸⁾。

バスティアンの旅行記はビルマから始まるが、ここに滞在中、さっそく「ビルマのチェス」に関する報告を『絵入り新聞』に寄稿している。細川(2023)でも触れたように、彼によるマックルック(および副次的にオク)の紹介の仕方は、この新聞記事におけるシットウイン(ビルマ将棋)の記述を前提としている。彼はトンゲーでこのゲームを知り、「私たちのもの[チェス]とは異なるが、関心をそそられないでもないもの」

の」(Bastian 1866b: 155)と評価している²⁹⁾。記事の冒頭で新聞記者が「この報告はとても短く、いくつか不明な点も含んでいる」(Anonym 1863: 18)と断っているように、この報告は非常に簡潔で、初期配置が自由であることと昇格のルール、そして駒の動きだけが紹介されている。さらに、ヤターとシッケ(マックルックのルアとメット)以外の駒は、その現地語名があげられていない。しかし、この記事からは、バスティアンのチェス観を垣間見ることができる。彼は、オリジナルであるチャトランガに似ている点を「愛好家にとって好ましい」と評価し、また、チェスに多くみられる、いわゆる「走り駒」を不自然だと思っていた³⁰⁾。

ビルマのチェスは、インドやアラビアのものに似ており、ヨーロッパのものとは異なっている。そして、本来の戦争ゲーム[チャトランガ]の特徴をより濃く残しているため、多くの愛好家にとっては、より好ましいと思われる。対局者は駒の配置を自由に決められ、駒はそれぞれ互いの間を自然な方法で移動する。それに対し、私たちのゲーム[チェス]には、盤の端から端まで1手で移動でき、1列まるごとカバーできるようなピースがある。

唯一、ヤターあるいは「戦車」だけが、私たちのルークと同じく盤の端から端まで動くことができる。しかし、私たちのものとまったく同じ動きをするナイトをのぞき、その他の駒はすべて1マスずつしか動けない。(Ebd.: 18)

その翌年に同紙に掲載された「シャムのチェス」は、「バンコクのアドルフ・バスティアン博士のご厚意によって書かれたもの」(Anonym 1864: 266)とされている。この「文化史に関する貴重な寄稿」(ebd.)は、駒の動きの説明がないため前回の記事以上に簡潔である。ただし、現地語による駒名はすべて紹介され、独自の解釈が加えられている³¹⁾。なお、初期配置の図は省

略したが、記事内でも誤っているように、クンとメットがチェスのキングとクイーンのように互いに向き合って配置されている。

シャムのチェスは、駒の動きに関してはまったくビルマのものと同一であり、両者の違いは以下の2点だけである。(1) ビルマのものとは違い、対局者は初期配置を自由に決めることができず、駒の配置はつねに同じである。この初期配置では、ポーンはピースから1列離れて置かれる(図参照)。(2) どのポーンも、相手のポーンが並んでいる(6列目の)マスまで進めば、ピースのメット(クイーンに相当)に昇格でき、場合によっては複数のメットが盤上に同時に存在することもありうる。[...] ビアがメットに昇格した場合、裏返され、開口部が上になるように置かれる。ピースの初期配置は、ヨーロッパのチェスとまったく同じである。ルークはルア(舟)、ナイトはマー(馬)、ピショップはコーン(貴族)、キングはクン(王)、クイーンはメット(小さきもの)と呼ばれる。最後の名称は、おそらく、この駒が「小貴族」にすぎないことを表しているのだろう。というのも、シャムのチェスにおけるクイーンは、ビルマのものと同様に、私たちのものに比べるととても弱い動きしかできないからである。(Anonym 1864: 266)

バステイアンは、シャム滞在中、その国王に厚遇され多くの調査を行うことができた。そのためか、旅行記においてはテーマごとに章を立て、かなり整理された形でこの国を記述している。マックルックについては、富くじやお手玉、双六などとともに「祝宴と遊戯」の章でとりあげられているが、シャムの遊戯における中国文化の影響が強調されている点が興味深い。将棋系ゲームに関して、まずは象棋をあげ、そのあとで「この土地特有のルールでも」と付け足しているのである。ド・ラ・ルベールが訪れた

17世紀末から200年近く経っても、シャムにおける象棋の人気は変わらなかったのだろう。なお、ここであげられている2人の人物が誰のことなのかは不明であるが、象棋に関しては北周の第3代皇帝である武帝(543-78)をその発明者とする説がある³²⁾。

シャムの富くじは、中国式のものを借用しており、「悪霊(Phi)」や「トラ(Süa)」など同じキャラクターが札に描かれている。[...] カード・ゲームと同様に、マックルックすなわちチェスも中国から借用しているが、チェスについてはこの土地特有のルールでもプレイされており、その形式においてはインド式と同数の駒が用いられる。このゲームを発明したのは“Bung-Ong”であり、もともと円形だったのを四角にしたのはその息子の“Bu-Ong”(第8代皇帝)である、と中国人たちは考えている。(Bastian 1867: 326f.)

『絵入り新聞』への寄稿ですでに紹介済みだからだろうが、ゲームそのものについては駒数しか述べられていない。そして、オクに関する記述はもっと簡素である。彼は、マックルックを紹介する際にシットウインについて述べたことを省略したように、オクを紹介する際にもマックルックとの違い(「種の跳躍」)しか述べていない。上述したように、彼がアンコール遺跡群を訪れたとき、そこが「シャム領」であったという事実は、カンボジアでプレイされている将棋系ゲームをシャムのものの一変種とみなす彼の認識に、つよく影響したに違いない³³⁾。

カンボジアに関する記述全般に言えることだが、オクに関する記述もテーマごとに整理されておらず、旅先でのメモ書きをそのまま印刷したようなまとまりのない文章に紛れ込んでいる。以下の箇所は、アンコール・ワットの碑刻文を調査し、シムリアップに帰還した翌日の記述であり、彼の文体的特徴がよく分かるよう前後の文章も訳出した。

Oct. 2024

カンボジアおよびタイにおける将棋系ゲームに関する史料について

その翌日（[1864年] 1月6日）の午前中に、私は“Chao Myang”[ムアンの長]³⁴⁾を訪ねた。客をもてなすために、接見の間には魚や鳥、焼き豚、バナナ、ケーキ、糖菓、アラク酒、ヤシ汁でいっぱいのテーブルが用意されていた。[…]“Chao Myang”の家の裏には、公共の米蔵がある。燃料油は、シェムリアップでは“Savai”[ナマズの一種]という魚から作られるが、それは、バンコクと同様にトンレサップでも捕れる。シェムリアップにおける上質の敷物は、トウでつくられている。カルダモン(Kavan)は、ポーサットやバットバン周辺の森で集められ、監視つきで貯蔵され、適宜バンコクに送られる。ブラック・カルダモン(Luk Reohj)はプラーチーンやラオ族の国で育つ。“Kabok”(竹の茎)のヤシ汁からは、黒糖ケーキを作ることができ(およそ手のひらサイズ)、7個で1ファン[1/8 パーツ]である。チェスに関して言えば、カンボジアでのプレイの仕方はシャムと同じであり、唯一の違いはメットが最初だけ2マス進めるがその後は進めない、という話であった。“Chao Myang”の夫人たちには、演劇に関する素養がある。“Vetsandon”[布施太子]について扱っている本生譚を解説していると、それは“Sangkharat”[大僧正]に転生する直前の生だから、転生の順が誤って述べられている、シャムに送らなければならない、と“Kha luang”[勅任弁務官]³⁵⁾が述べた。(Bastian 1868: 126f. 強調筆者、以下同様)

このように、オクに関する記述はなんの脈絡もなく、菓子値段と演劇に関する素養の話に挟まれており、シェムリアップにおける支配者階層との会話のなかで、たまたま出た話題のひとつにすぎなかったようである³⁶⁾。バスティアンは、カンボジアに関する記述について、旅行記第1巻の前書きで以下のように述べており、現地の人々から直接、情報を得ていたことを誇

らしく思っていたようである。おそらく、その信念にしたがって、この箇所も現地で耳にした話を日記からそのまま引用したのだろう。

カンボジアの歴史については、今まで書かれておらず、それに関する節に収められている言い伝えは、すべて民衆の口から私自身が書き留めた。(Bastian 1866a: x)

とくに、私がカンボジアでつけていた日記の記述は、最近発見された遺跡都市の文化的意味について解明しようとするものだが、一般的な歴史概観を行うこの巻においては、ほんの少ししか触れることができなかった。(Bastian 1866a: xiii)

また、この簡潔な記述に関しては、言語的な制約から詳細な調査および紹介が不可能であったという点も看過できない。バスティアンは、豊富に資料があったと述べているシャムとは対照的に、自らのカンボジア語に関する知識について以下のように述べている。

残念ながら、カンボジアの言語については、その文法についても語彙についても今まで出版されておらず、たしかに手書きの資料はあるものの、ペギーの言語[モン語]についてのものと同様にあまりに少なく、私はモールメンで慣用句に関するものをひとつ、バットバンで別のものをひとつ見かけただけである。バットバンでカンボジア語について少々、教えてくれたフランス人宣教師のシルヴェストル師³⁷⁾によれば、シャム語やアンナン語、中国語に共通する声調がほぼなく、1音節語か2音節語で成り立っており、3音節語もあるがそれ以上のものはまれである。(Bastian 1868: 259f.)

旅行記におけるマックルックおよびオクに関する簡素な記述だけをみれば、バスティアンは「東アジアの諸民族」の将棋系ゲーム

に対してとくに関心を払っていないように思われる。しかし、それは『絵入り新聞』へのシットゥインに関する寄稿が前提となっており、改めて詳しく記述する必要がないと彼が考えたためである。その傍証として、この旅行記には、その他にもジャワと日本における「チェス」に関する記述があり、彼にとっては初めて紹介するそれらのゲームについては、より詳細に紹介していることがあげられる。旅行記における記事の分量は、オクについてはたった31語だったのに対し、「ジャワのチェス」である“chatur” (Bastian 1869: 154) については98語（駒の現地語名や昇格のルールなど）、掲載ページの見出しにもなっている日本の「チェス・ゲーム」“Josin” (ebd.: 324) にいたっては252語（駒の形や現地語名、動きなど）も費やしている³⁸⁾。

そして、将棋系ゲームに関する直接の記述ではないが、細川 (2023) で紹介したヒムリーの将棋観に影響を与えていると思われるのが、この旅行記における「竜王 (Drachenkönig)」および仏教文化の伝播に関する記述である。バスティアンは、「ナーガ」のドイツ語訳として、アンコール遺跡群に関連する様々な箇所ですべて「竜王」という語を用いている。例えば、以下の箇所では、アンコール・ワットにおける彫像のナーガと乳海攪拌神話に登場するナーガの王ヴァース

キ、アンコール・トムに関する伝承に登場する魔物が、いずれも「竜王」と呼ばれている³⁹⁾。

主要な出入り口や多くの階段はライオンによって見守られており、周囲を囲む欄干にそって竜王がその首をもたげ、塔の隅の部屋では鮮明に刻まれた鳥人間 [ガルーダ] が両手にヘビを巻きつけて進む […]。 (Bastian 1868: 96, 図5)

別のホールの後ろの壁には、一面に乳海攪拌が描写されており、ヴィシュヌの化身であるクールマの内でマンダラ山 [須弥山] に巻きついた竜王の身体が、引っ張られて端から端まで伸びている。“Jacksa” (阿修羅) は、“Devada” (神々) とともにそれに組みついている […]。 (Ebd.: 98, 図6)

そこに住む恩知らずな人々に向けられた竜王の呪いによって、アンコール・トムは破滅した。この竜王は […] 水中にあるサンゴの宮殿から人びとが住む地上に現れるという習慣をもっていたが、4つの顔をもつブラフマーの像が立てられると、それを恐れて逃げ去った。 (Ebd.: 110f.)

仏教の伝播に関して、バスティアンは、セイロンからの影響が広まる以前の話として、以下のように述べている。ここでは、仏教文化が



図5 アンコール・ワットの欄干にみられるナーガの像

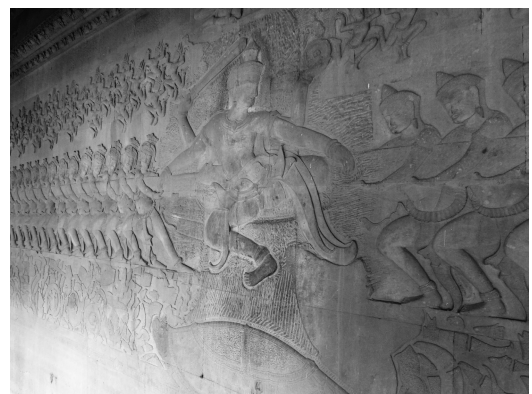


図6 アンコール・ワットの乳海攪拌のレリーフ

Oct. 2024

カンボジアおよびタイにおける将棋系ゲームに関する史料について

ジャワからシャムやカンボジア、そして日本にまで広まっていったとされており、将棋系ゲームが仏教とともに東南アジアから日本へ伝播したと考えたヒムリーとの類似がみられる⁴⁰⁾。

ジャワは、バラモン教および仏教文化にとっての避難場所だったが、後にはその新たな中心地となり、そこからこれらの文化が周辺の国々をこえて広まっていき、シャムやカンボジア、日本の宗教的言語にサンスクリット語の影響を与えた。その後、パーリ語による文献が優勢になると、たしかにその痕跡は薄れたが、それでも完全には消え去っていない。(Bastian 1868: 102)

2. ヒムリーによる新聞記事と論文

ヒムリーがオクおよびマックルックに言及した例については、細川 (2020, 2023) において、すでに将棋の東南アジア伝來說との関連から、以下の点を紹介した。すなわち、「オク・チャトラン」という名称に「チャトランガ」の名残があることから、カンボジアには将棋系ゲームが6世紀から7世紀にかけての早い時期に伝わったと考えられること、マックルックと将棋には、コーンと銀将の動きなど複数の共通点が見られること、マックルックにも将棋にも駒名に仏教の影響(龍王など)がみられ、仏教の東南アジアから東アジアへの伝播が将棋系ゲームの伝播と変化に関係していたと考えられることである⁴¹⁾。

彼による記述のうち筆者が確認できたものを時系列順に整理すると、以下のとおりである⁴²⁾。ヒムリーは、1880年代に入ってからMoura (1883)をはじめ、オクを含むカンボジアに関する文献も手に入れることができた(例えば、Himly [1889]では、エティエンヌ・エモニエ [Étienne Aymonier, 1844-1929]の著作にも言及している)。とくに80年代後半からカンボジアについて言及する例が増えているが、おそらくこの時期に多くの文献が手に入り、彼の関心がインドシナ半島に向いていたのだろう。

彼の東南アジアの言語に関する2つの研究も、この時期に発表されている(1889年にモン語、1890年にチャム語について)。

- a) Himly (1870): 将棋系ゲームの起源について(インド、中国とならびカンボジアも候補に)
- b) Himly (1879): 将棋とマックルックの共通性について(銀将の動き)
- c) Anonym (1879): マックルックの駒名と動き、およびマックルックと将棋の共通性について(ピアの配置と動き、コーンの動き)
- d) Himly (1885): マックルックの駒名と動き、およびマックルックと将棋の共通性について(ピアの配置と動き、コーンの動き)
- e) Himly (1887): 将棋系ゲームの起源について(かつてカンボジア起源説をあげたが論拠はないこと)
- f) Himly (1889): オクについて(将棋系ゲームのカンボジア語名とムーラによる記述のドイツ語訳、カンボジアにおける仏教とバラモン教の影響、オクの駒が登場する民話、古代における中国とカンボジアの交流など)
- g) Himly (1895-1901 [2019]): 将棋系ゲームのカンボジアへの伝来について(6～7世紀と推測)

このうち、マックルックを中心的に扱っているのはAnonym (1879)のみである。同記事がマックルックにおける(戦争を厭う)仏教の影響、そして将棋との類似性を強調している点についてはすでに細川 (2023) で紹介しているので、ここでは駒名の解釈だけ抜粋して紹介する。ヒムリーとされる匿名の情報提供者は、現地語による駒の名称とその意味を正確に把握しておきながら、チャトランガに存在しない駒名の由来を解釈する方法のひとつとして、パーリ語の省略形である可能性をくり返し主張してい

る。

このゲームそのもの（マックルック）および駒の名称は、一部、その意味がやや不明瞭である。そのため、そもそもは単音節言語を話すこの土地の人々が、このゲームのためにパーリ語、すなわち仏教の言語から多くの表現を借用したと考える以外にも、さまざまな解釈をする余地がある。

(1) ビアは、「貝」を意味する。しかし、貝は貨幣としても用いられているため、ビアは「貨幣」や「報酬」という意味でもある。[…](2) ルアあるいは「舟」は、古代インドのゲームにおける“naukā”，古いロシア語の“ladija”やジャワ語の“prau”に相当し、我々のルークと同様に動く。[…](3) マーあるいは「馬」は、その名前、配置、動きから、すべてのチェス系ゲームが共通の起源をもつことの、もっとも強力な証拠である。[…](4) コーンとは、我々の情報提供者およびパレゴワ師の辞書によれば「根」という意味であり、「象」のコマがあるべき位置に配置される。[…]このように[マックルックに対する仏教の影響を]考えてみると、現地語で「根」を意味するコーンだが、宗教に関する借用語を省略しただけのものという可能性はまったくありえない、とも言いきれないだろう。

(5) クンは、我々のキングに相当する。この語は、そもそもは国の上流階級に属する人物を指し、「崇高な」という意味の“luang”とともに用いられ「王」という意味になる(khun luang)。[…](6) 同様に、メットは、初期配置だけでなく、その動き、そしてポーンが昇格したときに成れるコマである点にいたるまで、ベルシャのフェルス、すなわち中世までのまだ新しい動きを手に入れていないクイーンとそっくりである。しかし、その名前が、現地語では「粒」や「種」を意味するというのは、不思議に思わざるを得ない。そのため、この名称もま

た、インド由来の名称の省略形なのではないか、と思われる。(Anonym 1879: 300)

ヒムリーが実名で執筆したもののなかでもっとも詳細なのはHimly (1885) であるが、この新聞記事は、本来はシュトレベック式クアリーエ・シュビール(クアリー・シュビール)の起源を論じたもので、そのゲームとの比較対象としてマックルックが取りあげられているにすぎない。ただし、将棋系ゲームの発展史を扱っているからこそ、Anonym (1879) では触れられていない、より古い時代の将棋系ゲームとマックルックとの関係についての彼の考えが述べられている点が興味深い。彼は、東洋では(名称とは異なり盤や駒の動きに関しては)将棋系ゲームの「古い」姿がマックルックにもっともよく残されていると評し、「象」の駒以外は、ヨーロッパに伝来した当初の「古いチェスそのもの」と断じている⁴³⁾。

それと同様に、アラビア人によってヨーロッパに伝えられたペルシャ式のチェスの姿は[…], 当地で新たに加わった駒を度外視すればクアリーエ・シュビールにみられるし、また今日の東洋のゲームに関しては、シャムのチェスにもっともよく残されている(しかし、シャムでは、ビショップの代わりに日本の銀将と同じ動きをする駒が用いられている)。(Himly 1885: 5)

上述のとおり、シャムのチェスは、64マスだが色分けされていない古い盤でプレイされている。このゲームは、ビショップの場所にある駒だけは異なるが、すでに紹介した古いチェスそのものである[…](Ebd.: 11)

一方、オクに関する考察としては、Himly (1889) におけるムーラの報告に関する記述がもっとも分量がある。「この地[カンボジア]では仏教とバラモン教とがあまりにも混ざり合っている」(Himly 1889: 416)と認識していたヒム

Oct. 2024

カンボジアおよびタイにおける将棋系ゲームに関する史料について

リーは、マックルックの駒名を仏教との関連から考察したように、この箇所ではアンコール・ワットのレリーフと関連づけながら、その駒名の由来を(『シャー・ナーメ』とならび)ラーマーヤナに見出そうとしている。このうち、「舟」とラーマーヤナにおけるランカー島への進軍を結びつけるという発想は、すでにAnonym (1879)やHimly (1885)におけるマックルックについての考察でもみられる⁴⁴⁾。

「魚」は一般的に“trey”と呼ばれており、それに比べ、おそらくサンスクリット語の“matsya”に由来するであろう“michha”はあまり使われていない。残念ながら、ムーラは“sdach”以外の駒名を記述していない。「舟」は、シャムの“rüa”などに見られる。これらは(「魚」も?)ランカー島とラーマーヤナを想起させ、「塔[ルーク]」はインドの対岸に位置するセイロン島の“ratha”(「車」)と呼ばれる構造物を[...]想起させるが、「女王」という名称を文字どおりに受け取ることは困難である。よく知られているように、それは、アンコール・ワットに刻まれたラーマーヤナの一場面である。その中庭でチェスがされていたという伝承をムーラが聞き取っているが、そこはより新しい仏教のための建物に囲まれた庭なので、[仏教化して以降の]後世に作られた物語の可能性がある。しかし、例えそうだったとしても、それらのより深い関係を推測しえないほど、このインドの英雄譚はカンボジアにしっかりと根づいている。(Himly 1889: 416)

バスティアンが、シットウインをチャトランガの特徴をより濃く残していると評価した一方で、ヒムリーは、マックルックをより古い時代のチェスそのものと評価している。両者は、東南アジアの将棋系ゲームを同じような関心から扱っていたのである。しかし、決定的な違いは、メットという駒名の解釈に顕著なように、仏教

を研究するために東南アジアを訪れたバスティアンの方は、それらのゲームに一切、宗教的な要素を見出していないのに対し、チェス史の研究者であったヒムリーは、(Linde [1874]の影響もあり)仏教とそれに混ざり合ったバラモン教との関連からこれらを理解しようとしていた点である⁴⁵⁾。

V おわりに

19世紀末までの欧米の言語による史料だけをみても、マックルックについては複数の文献があり、Low (1836)のように詳細な記述もある一方で、オクに関するまとまった記述はMoura (1883)に限られている。しかも、それでさえ、現地語による駒名さえも断片的にしか言及していない。オクとマックルックとの違いを明言しているのは、シェムリアップの支配者階層から聞き取った内容を乱雑に記したBastian (1868)のみである。このような扱いの違いには、欧州列強に対し独立を保ちカンボジア北部を支配しつづけていたシャムと、フランス領コーチシナの一部に過ぎなかったカンボジアとの政治的影響力の差が反映されているのだろう。とりわけ、これらの文献が書かれた当時、ヨーロッパ人の注目を集めていたアンコール遺跡群が、そこに刻まれた将棋系ゲームのレリーフとともにシャムに属していたことは、カンボジアの将棋系ゲーム史にとって不幸なことであった。当時のヨーロッパ人の目には、カンボジアはシャム(およびベトナム)の一部、オクはマックルックのローカル・ルールとしか映らなかったに違いない。

いずれにせよ、オクおよびマックルックに関する史料を整理した結果、以下の点が明らかになった。両ゲームかその原型となるゲームは、12世紀前半にはクメール帝国に普及しており、同国の日常生活を描くうえで重要な要素とみなされていた。シャムに関しては、遅くとも17世紀末までには象棋が普及しており、19世紀中期にいたるまで、マックルックと並行して

象棋がプレイされていた。17世紀末における同ゲームに関しては、フランス人が自国のチェスと混同していたことから、ビアの3列目配置など、チェスとの明確な違いがまだなかった可能性もある。オクとマックルックの区別については、ほぼすべての史料において明確ではなく、唯一、Bastian (1868) において「種の跳躍」が両者の違いとして指摘されているだけで、「王の跳躍」については、いずれの史料でも言及されていない。しかも、Low (1836) によれば、バステリアンがシャムを訪れる数十年まえまではシャムでも「種の跳躍」が採用されていた。

本稿では、現在でも盛んにプレイされている将棋系ゲームのなかでは、(少なくとも日本語圏では) とくにその歴史研究が進んでいないオクおよびマックルックに関する史料をまとめた。これらの情報が、今後の将棋系ゲーム史研究に貢献することを願う。

注

- 1) Vgl. Himly 1870: 121; Himly 1887: 461f.; 細川 2023: 58f.
- 2) 「王の跳躍」は、キングに相当する駒が最初に動くときのみ横向きに桂馬跳びができるというルールであるが、チェスのキャスリングと同様に王手がかけられている場合にはこの動きは行えない。また、「種の跳躍」は、クイーンに相当する駒がチェスのポーンのように、最初に動くときのみ前に2マス進めるというルールである。また、伊藤(2021)によれば、カンボジアとタイだけでなく、ラオスでも同様にこのタイプの将棋系ゲームがプレイされている。Vgl. Cazaux/Knowlton 2017: 79; 伊藤 2021: 6f., 12; Wong 2023.
- 3) ただし初手で2マス進むことはできない。
- 4) Linde (1874) によれば、チャトラングの「車」にあたる駒の名称としての「舟」は、カンボジアやシャムだけでなく、セイロンやロシアにもみられる。また、「王」に関しては、「スダチ」という表記もみられる。Vgl. Linde 1874: 81f.; 北川 2006: 187.
- 5) Vgl. Cazaux/Knowlton 2017: 78, 363.
- 6) クメール帝国と交易を行っていた南宋の趙汝适によれば、1225年頃の同帝国には戦象が20万頭ちかくもいたという。趙 1989: 168 参照。
- 7) Vgl. 石澤 2013: 29ff., 91f., 651f., 658f.; 増川 2013: 25; Cazaux/Knowlton 2017: 83ff.
- 8) Vgl. 増川 1996: 193f.; Ellinghoven 2003: 96ff., 102;

増川 2013: 24; 清水 2017: 103ff.

- 9) レリーフの認知度に関して一例をあげると、Ellinghoven (2003) があげたレリーフのうち、『地球の歩き方 2024 ~ 25 アンコール・ワットとカンボジア』(2023, Gakken) で「将棋」のレリーフとして紹介されているのはバイヨン寺院の「戦争まえ」のものだけである (ebd.: 56)。Vgl. フーオッ 1995: 58; Ellinghoven 2003: 96ff., 101f.
- 10) Ellinghoven (2003) は、「馬」の駒が抽象的であった可能性については、インドの駒などをその傍証として挙げている。その一方で、同時期に作られた可能性のあるブリラム窯の駒には、現在の「馬」にかなり近いものが含まれている。Vgl. Ellinghoven 2003: 101f., 112ff.; 清水 2016: 60f.
- 11) 清水 2016: 60; Chaisuwan 2016: 68; 清水 2017: 113 以下参照。
- 12) Vgl. Ellinghoven 2003: 102f.; ポーロ 2022: 231.
- 13) この記述がポーロ自身によるものだったとしても、私見によれば、当時のチャンパ王国では、象棋の駒を(例えば漢字の識字率が低いなどの理由から) 分かりやすく色の違いで敵味方に区分していた可能性もあるため、やはりオクの記述だとは断定できない。Vgl. Ellinghoven 2003: 102ff.; 石澤 2009: 100.
- 14) アンコール・トムのバイヨン寺院にも、中国人を描いた多くのレリーフがみられる。周 1989: 44, 54, 77, 79; 和田 1989: 137 以下, 142 参照。
- 15) フーオッ 1995: 121 以下, 127 以下; 北川 2006: 16; 石澤 2013: 47 以下; キン 2019: 31 以下, 43, 46 以下参照。
- 16) 伊藤 (2021) によれば、アユタヤ時代の庶民層を描いた民話にもマックルックは登場する。飯島 2020: 91 以下; 伊藤 2021: 32 参照。
- 17) Vgl. Ellinghoven 2003: 113; 伊藤 2021: 32.
- 18) アユタヤでは、一時期、日本人も大きな勢力を持っていた。たとえば、1593年には500人もの規模の日本人傭兵部隊が存在している。シャムと日本とは16世紀末から交易を行っていたようだが、記録が残っているのは徳川家康の朱印船貿易からで、1604年から35年までに少なくとも56隻(全350隻中) がシャムに向かっている。アユタヤに移住した日本人の多くは弾圧を逃れたキリシタンで、さらに関ヶ原の戦い後には浪人が傭兵としてシャムに渡っている。この日本人部隊は、ナーラーイが王位につく際に活躍した。1632年にアユタヤで迫害を受けた日本人たちは、カンボジアに渡っている。なお、カンボジアの当時の首都ウードン近郊のピニャルーにも日本人町があり、1618年には約70人の日本人キリシタンが住んでいたという。また、同地には70から80もの家族が住んでいたとする説もある。将棋とオク(マックルック)の類

Oct. 2024

カンボジアおよびタイにおける将棋系ゲームに関する史料について

似を論じる際には、こうした日本人移民の影響についても考慮する必要があるだろう。Vgl. Linde 1874: 85; 小倉 1989: 104f., 113, 137; 北川 2006: 135f.; 清水 2013: 16f.; 石井 2020: 158f., 176f., 181ff.

- 19) ただし、シャムとフランスの接近を促したギリシャ人コンスタンティン・フォールコンは、その専横を危険視され、ド・ラ・ルベールが帰国したのと同年の1688年に殺害されている。その影響で、両国の関係は一時的にだが悪化した。石井 2020: 184以下, 190参照。
- 20) キン 2019: 56参照。
- 21) ムオ以前にも西洋人は同地を訪れていたし、「発見」当時も首都としては放棄されていたものの、上座部仏教の寺院としては機能していた。なお、ムオ自身もその旅行記でシャムにおける将棋系ゲームについて言及しているが、その内容にまでは触れていないため、本稿では取りあげていない。また、バスティアンがアンコール・ワットを訪れたのは、厳密には1863年12月末からである。Vgl. Bastian 1868: 80f., 125; 石澤 2002: 343ff., 347ff.; ムオ 2002: 42; 石澤 2013: 65ff., 69.
- 22) 細川 (2023) においては、Murray (1913) が『絵入り新聞』ではなく『ドイツ・チェス新聞 (*Deutsche Schachzeitung*)』に転載された記事を参考にして、後者の記事にはヒムリーの名前が挙げられている可能性を指摘した。しかし、その後、『ドイツ・チェス新聞』の記事が確認できたが、『絵入り新聞』に掲載されたのと同じの記事であり、記者も情報提供者も匿名であることが分かった。Vgl. Anonym 1880: 321; Murray 1913: 23; 細川 2023: 71.
- 23) Vgl. Smyth 2007: 159.
- 24) Vgl. Low 1836: 375ff.
- 25) コーンが「後ろの駒を」とれないという箇所は、「真後ろの駒を」という意味なのかもしれない。なお、メットを2マス進めてからプレイする場合、当然、その前に位置するピアを先に1マス進めておく必要がある。伊藤 2021: 12参照。
- 26) Vgl. Moura 1883: 410; Himly 1889: 415ff.; Murray 1913: 117f.; 北川 2006: 10; Angkor Database.
- 27) なお、この混同について、マレーは「将」の駒が“in the place of Castles” (Murray 1913: 118) であると訳しているが、原文では“ayant la forme de tours”である。フランス語の“tour”には「ルーク」という意味もあるが本来は「塔」の意であり、「塔の形の」とも訳せる。ドイツ語においてもルークの駒は「塔」を意味する“Turm”と呼ばれており、Himly (1889) におけるドイツ語訳でも“in Gestalt von Türmen” (Himly 1889: 416) となっている。したがって、同箇所は、ムーラがコールを「仏塔の形をした『将』の駒」と呼んでいるとも考えられるが、

その場合、キングやクイーンにあたる駒も同じ仏塔の形をしているにも関わらず言及されていない点が問題となる。Vgl. Himly 1889: 415ff.; Murray 1913: 117f.

- 28) Vgl. Schwarz 1909: 6f., 14; NDB.
- 29) Vgl. Bastian 1866b: 358; 細川 2023: 71.
- 30) 将棋系ゲームについて、バスティアンは旅行記において以下のように述べており、インド起源であると確信していたようである。『「被造物の驚異と万物の珍奇」[ザカリヤー・カズウィーニーによる博物誌]によれば、チェスはヌーシルラワーン[ペルシャのホスロー 1 世]の大臣だったブズルグミフルによってインドから伝えられた」(Bastian 1866b: 155)『[ペルシャの]チェス・ゲームもまた、シャトランジあるいはチャトランガ(4部隊からなる軍)という、インド式に動く」(Bastian 1869: 188)
- 31) バスティアンはシャムに関して、ジョン・テイラー・ジョーンズ (John Taylor Jones, 1802-51) やジャン＝バプティスト・パレゴワ (Jean-Baptiste Pallegoix, 1805-62) ら宣教師たちが著した書籍だけでなく、彼らが言及していない資料も手に入れ参考にしていた。Vgl. Bastian 1866a: x.
- 32) 「もともと円形だった」とあるのは、19世紀にはプレイされていた「三国志チェス」のような円形に近い盤を使う変種を指しているのかもしれない。Vgl. Himly 1870: 107f.; Schwarz 1909: 7; メレンドルフ 2020: 135f.
- 33) バスティアンは、カンボジア訪問当時の状況を、「ムアン・シェムリアップとムアン・バツタンバンはバンコクから支配されていたが、ポーサットから南はウードン国に属していた」(Bastian 1868: 125) と述べている。なお、「ムアン」は、村の上位に位置する行政単位であり、「ウードン」は当時のカンボジアの首都である。小泉 2020: 265参照。
- 34) 旅行記の別の箇所では、「知事」と訳されている。Vgl. Bastian 1868: 191.
- 35) シャム国王に任じられた弁務官。旅行記の別の箇所では、「王の僕」と訳されている。Vgl. Bastian 1868: 77, 193.
- 36) 「メット」という駒名を使っていることから、これらの会話はタイ語で行われた可能性が高い。なお、バスティアンがカンボジア滞在中に目にした「チェス」に関しては、もうひとつ別の箇所でも触れられている。それは、バツタンバンにある僧院の壁にかけられた絵画についての描写で、彼はワット・バナナなどこの町の近くにある遺跡群を調査したあとにそこを訪れていた。しかし、それは本生譚に含まれる1エピソード(高価な装飾品と学者を賭けた「チェス・ゲーム」)を描いたものであり、オクについて記しているとはいえない。

Vgl. Bastian 1868: 233f.

- 37) この人物の詳細は不明だが、バットンバンで活動していることから、ムオに同地を案内した宣教師と同一人物である可能性が高い。ムオ 2002 : 179, 190 以下参照。
- 38) バスティアンは、この箇所では将棋そのものの名称だけでなく、いくつかの駒名も誤って紹介しているが(飛車を“Cha”[車?], 香車を“Jarru”[槍?]など)、同書の別の箇所では正確に「チェス・ゲームは“Shoghi”と呼ばれている」(Bastian 1869: 343)と述べている。
- 39) このうち最後の例は、この都に禍をなすという点がピミアナカス寺院に現れたとされる雌蛇の精霊を想起させるが、バスティアンが聞き取った伝承では魔物は水棲とされ、王との同衾には触れられていない。周 1989:18 以下; フーオツ 1995:42 以下, 68 参照。
- 40) Vgl. Himly 1885: 11; 細川 2023: 64f.
- 41) 細川 2020 : 145 以下; 細川 2023 : 58 以下, 64 以下参照。
- 42) Vgl. Himly 1870: 121; Himly 1879: 679; Anonym 1879: 299f.; Himly 1885: 3ff., 11ff., 15; Himly 1887: 461; Himly 1889: 415ff.; Himly 2019: 55.
- 43) ヒムリーは、なぜかここでは言及していないが、もちろんピアの3列目配置も正確に把握していた。また、同記事において、ヨーロッパに伝来した当初のチェスがどのようなものであったかも詳しく論じている。Vgl. Himly 1885: 2f.
- 44) 「塔」と「車」については、ムーラによる「ルークの形の」という記述に由来する。チャトラングの「車」にあたるルークは、フランス語でもドイツ語でも「塔」と呼ばれる。Vgl. Anonym 1879: 300; Himly 1885: 4.
- 45) 細川 2023 : 64 以下参照。

一次文献

- 周達観 (1989) : 『真臘風土記』(和田久徳訳), 平凡社。
- ポーロ, マルコ (2022) : 『東方見聞録』(青木富太郎訳), 河出書房新社。
- Anonym (1863) : Schach in Birma. In: *Leipziger Illustrierte Zeitung*. 4.7.1863. S. 18.
- Anonym (1864) : Schach in Siam. In: *Leipziger Illustrierte Zeitung*. 16.4.1864. S. 266.
- Anonym (1879) : Das siamesische Schachspiel. In: *Leipziger Illustrierte Zeitung*. 11.10.1879. S. 299–300.
- Anonym (1880) : Das siamesische Schachspiel. In: *Deutsche Schachzeitung*. 1880. S. 321–324. [= Anonym 1879]
- Bastian, Adolf (1866a) : *Völker des östlichen Asien*.

- Bd. 1. Die Geschichte der Indochinesen*. Leipzig.
- Bastian, Adolf (1866b) : *Völker des östlichen Asien*.
- Bd. 2. Reisen in Birma in den Jahren 1861–1862*. Leipzig.
- Bastian, Adolf (1867) : *Völker des östlichen Asien*.
- Bd. 3. Reisen in Siam im Jahre 1863*. Jena.
- Bastian, Adolf (1868) : *Völker des östlichen Asien*.
- Bd. 4. Reise durch Kambodja nach Cochinchina*. Jena.
- Bastian, Adolf (1869) : *Völker des östlichen Asien*.
- Bd. 5. Reisen im indischen Archipel. Singapore, Batavia, Manilla und Japan*. Jena.
- Himly, Karl (1870) : The Chinese game of Chess as compared with that practised by Western nations. In: *Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society*, 6. S. 105–121.
- Himly, Karl (1879) : Das japanische Schachspiel. In: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 33. S. 672–679.
- Himly, Carl [Karl] (1885) : *Schach- und Kurrierspiel – Ströbeck und Morgenland*. Separat-Abdruck aus der Halberstädter Zeitung und Intelligenzblatt. Halberstadt.
- Himly, Karl (1887) : Anmerkungen in Beziehung auf das Schach- und andere Brettspiele. In: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 41. S. 461–484.
- Himly, Karl (1889) : Morgenländisch oder abendländisch? Forschungen nach gewissen Spielausdrücken. In: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 43. S. 415–463.
- Himly, Karl (2019) : *Die Abteilung der Spiele im „Spiegel der Mandschu-Sprache“*. Hrsg. v. Oliver Corff. München.
- Loubère, [Simon] de la (1691) : *Du royaume de Siam*. Tome premier. Paris. (= 『シャム王国誌』)
- Loubère, [Simon] de la (1800 [1691]) : *Beschreibung des Königreichs Siam*. Übersetzer nicht benannt. Nürnberg.
- Low, James (1836) : On Siamese literature. In: *Asiatic Researches. Or Transactions of the Society Instituted in Bengal for Inquiring Into the History and Antiquities, the Arts, Sciences and Literature of Asia*. Vol. 20. S. 338–392. (= 『シャムの文学について』)
- Moura, J [ean] (1883) : *Le royaume du Cambodge*. Tome premier. Paris. (= 『カンボジア王国誌』)

二次文献

- 石井米雄 (2020) : 「港市国家アユタヤー」, 飯島明子・小泉順子編『タイ史』, 山川出版社, 148–202 ペー

Oct. 2024

カンボジアおよびタイにおける将棋系ゲームに関する史料について

- ジ。
- 石澤良昭 (2002): 「アンリ・ムオに続くアンコール発見史物語」, アンリ・ムオ『インドシナ王国遍歴記 アンコール・ワット発見』(大岩誠訳), 中公文庫, 343-361 ページ。
- 石澤良昭 (2009): 『アンコール・ワットへの道 クメール人が築いた世界遺産』, 内山澄夫 (写真), JTB パブリッシング。
- 石澤良昭 (2013): 『〈新〉古代カンボジア史研究』, 風響社。
- 飯島明子 (2020): 「北方の「タイ人」諸国家」, 飯島明子・小泉順子編『タイ史』, 山川出版社, 74-147 ページ。
- 飯島明子・小泉順子編 (2020): 『タイ史』, 山川出版社。
- 伊藤拓馬 (2021): 『タイの民間ゲーム』, 双天至尊堂。
- 小倉貞男 (1989): 『朱印船時代の日本人 消えた東南アジア日本町の謎』, 中公新書。
- 北川香子 (2006): 『カンボジア史再考』, 連合出版。
- キン, ソック (2019): 『カンボジア近世史 カンボジア・シャム・ベトナム民族関係史 (1775-1860)』 (石澤良昭訳), めこん。
- 小泉順子 (2020): 「絶対王政の構築」, 飯島明子・小泉順子編『タイ史』, 山川出版社, 248-299 ページ。
- 清水康二 (2013): 「将棋伝来再考」, 檀原考古学研究所『考古學論叢』36, 1-20 ページ。
- 清水康二 (2016): 「マックルック駒の形態からみた東南アジア経由説——ピアの成駒反転の検討——」, 清水康二他編『将棋類の伝播に関する研究——タイ将棋マックルックを中心に——』, 大阪商業大学アミューズメント産業研究所, 55-63 ページ。
- 清水康二 (2017): 「東アジア盤上遊戯史研究」, 明治大学博士学位請求論文。
- 趙汝适 (1989): 「諸蕃志」, 周達観『真臘風土記』(和田久徳訳), 平凡社, 167-172 ページ。
- 長澤和俊 (1989): 『海のシルクロード史 四千年の東西交易』, 中公新書。
- フーオット, タット (1995): 『アンコール遺跡とカンボジアの歴史』(今川幸雄編訳), めこん。
- 深作光貞 (1965): 『写真 アンコール・ワット』, 角川文庫。
- 細川裕史 (2020): 「訳者解説」, メレンドルフ／ヒムリー「19世紀のドイツ人がみた東洋のチェス」(細川裕史訳), 『阪南論集 人文・自然科学編』55 (2), 142-150 ページ。
- 細川裕史 (2023): 「カール・ヒムリーとその知られざる業績——ヨーロッパで初めて将棋史を論じた男——」, 『阪南論集 人文・自然科学編』58 (2), 55-73 ページ。
- 増川宏一 (1996): 『将棋の起源』, 平凡社。
- 増川宏一 (2013): 『将棋の歴史』, 平凡社。
- 増田えりか (2020): 「華人の時代」, 飯島明子・小泉順子編『タイ史』, 山川出版社, 203-247 ページ。
- ムオ, アンリ (2002): 『インドシナ王国遍歴記 アンコール・ワット発見』(大岩誠訳), 中公文庫。
- メレンドルフ, O. v. (2020 [1876]): 「中国人のチェス・ゲーム」, メレンドルフ／ヒムリー「19世紀のドイツ人がみた東洋のチェス」(細川裕史訳), 『阪南論集 人文・自然科学編』55 (2), 128-136 ページ。
- 和田久徳 (1989): 「解説」, 周達観『真臘風土記』(和田久徳訳), 平凡社, 137-160 ページ。
- Banaschak, Peter (2001): *Schachspiele in Ostasien. Quellen zu ihrer Geschichte und Entwicklung bis 1640*. München.
- Chaisuwan, Boonyarit (2016): History of Makruk. In: 清水康二他編『将棋類の伝播に関する研究——タイ将棋マックルックを中心に——』, 大阪商業大学アミューズメント産業研究所, S. 65-69.
- Cazaux, Jean-Louis/Knowlton, Rick (2017): *A World of Chess. Its Development and Variations through Centuries and Civilizations*. Jefferson.
- Ellinghoven, Bernd (2003): Kambodschan. Work in Progress zur Geschichte des Schachspiels in Kambodscha. In: *Kambodschanische Kultur*, 8. S. 90-122.
- Linde, Antonius v. d. (1874): *Geschichte und Litteratur des Schachspiels*. Bd.1. Berlin.
- Murray, H. J. R. (1913): *A History of Chess*. London.
- Schwarz, Richard (1909): *Adolf Bastians Lehre vom Elementar- und Völkergedanken*. Dissertation. Universität Leipzig. Leipzig.
- Smyth, David (2007): James Low, On Siamese Literature (1839). In: *Journal of the Siam Society*, 95. S. 159-160.
- <https://angkordatabase.asia/authors/jean-moura/> / Angkor Database: (Stand: 27.12.2023)
- https://en.wiktionary.org/wiki/Wiktionary:Main_Page / Wiktionary: (Stand: 24.1.2024)
- <http://www.ndb.badw-muenchen.de/> (= NDB) / Neue Deutsche Biographie: (Stand: 29.4.2024)
- Wong, Dale John (2023): Cambodia Has Its Own Version of Chess at the 2023 SEA Games. How Is It Different? Time to play “Ouk chaktrang”. In: *Mashable SE Asia*. 2023.5.9: <https://sea.mashable.com/life/23567/cambodia-has-its-own-version-of-chess-at-the-2023-sea-games-how-is-it-different> (Stand: 12.11.2023)

(2024年7月12日掲載決定)